



Title	日本語の類別詞表現の否定指向性に関する一考察
Author(s)	越智, 正男
Citation	言語文化共同研究プロジェクト. 2015, 2014, p. 11-20
Version Type	VoR
URL	https://doi.org/10.18910/54355
rights	
Note	

The University of Osaka Institutional Knowledge Archive : OUKA

<https://ir.library.osaka-u.ac.jp/>

The University of Osaka

日本語の類別詞表現の否定指向性に関する一考察*

越智正男

1. はじめに

本稿の目的は類別詞表現が数詞の「1」を伴い最小化詞として否定文に生起する際の統語構造を探ることである。議論の前提として、本稿で「前置型」、「後置型」、「遊離型」と呼ぶ3つのタイプの類別詞表現について簡単に確認しておきたい。前置型は、(1a)のように「数詞+類別詞」が「の」を伴った形で名詞の前に現れるタイプである。そして(1b)のタイプを本稿では後置型と呼ぶ。これは数詞と類別詞が名詞の直後にくるタイプである。そして遊離型は「数詞+類別詞」が名詞から離れた位置に現れる(1c)のタイプである。

- (1) a. 太郎は3個のりんごを食べた.
b. 太郎はりんご3個を食べた.
c. 太郎はりんごを3個食べた.

本稿はこのような類別詞表現が否定指向性(negative-sensitivity)を持つ場合についての新たなデータを提示すると共にその分析を試みるものである。以下が「最小化詞」の例文である。¹ これは、数詞「1」と類別詞（及びとりたて詞の「も」）の組み合わせによる。

- (2) a. 太郎は1個のりんごも食べなかった.
b. 太郎はりんご1個食べなかった.
c. 太郎はりんごを1個も食べなかった.

助詞の「1」+類別詞が否定の環境に生起することにより、「太郎が食べたりんごの数が1より少ない（つまりそのようなりんごがない）」という解釈が生まれる。ただし、これらの例文のうち、純粹に否定指向性を持つと考えられるのは(2b)にある後置型だけであろう。(2)から否定辞を除くと以下のようになる。

- (3) a. 太郎は1個のりんごも食べた.

* 本研究は科学研究費基盤研究(C)(No. 25370431)の助成を受けて行われている。

¹ 「類別詞表現+も」を否定極性の観点から分析する立場（中西（2010）、片岡（2009）等）と否定一致（NCI）の観点から分析する立場（Watanabe（2004）、久野（2010）等）があるが、紙面の都合上ここではこの問題には立ち入らない。

- b. *太郎はりんご 1 個食べた.
- c. 太郎はりんごを 1 個も食べた.

(3a)は、沼田 (2000) が言うところの「累加」の解釈がある（例えば「3 個のみかんに加えて 1 個のりんごも食べた」という意味で解釈できる）。また、(3c)では「の」が持つ「意外」の意味があるであろう。例えば、「予想に反して 1/3 個や半分ではなく、1 個食べた」という解釈である（「1 個」の場合には不自然であるが、これが「20 個」であれば自然であろう）。これに対して、(3b)は純粋に非適格である。この意味で、数詞の「1」を伴う後置型最小化詞表現は以下のような「wh も」や「wh+1+CL」表現と同類であると見做すことができる。

- (4) a. 太郎は {何も/何 1 つ} 食べなかった.
 b. *太郎は {何も/何 1 つ} 食べた.

次節では(2b)のような後置型最小化詞の統語分布について主に考察してみたい。

2. 最小化詞の統語的分布

最初に考えてみたいのは、前置型や後置型の最小化詞表現が項 (argument) の位置にあるのか付加詞(adjunct)の位置にあるのか、という点である。Aoyagi and Ishii (1994)が議論するように、「wh も」の形をした否定指向表現は付加詞である可能性がある。これは以下の例文が示すように、「wh も」表現を含む節にそれと関連する顕在的な項が共起するという観察に基づいている。²

- (5) a. 昨日学生が {誰も/誰 1 人} 来なかつた.
 b. 太郎は果物を {何も/何 1 つ} 買わなかつた.

ここで先の最小化詞と同じ節に顕在的な項を加えてみる。

- (6) a. (?)その森を歩いている間、昆虫を一匹のアリも見なかつた.
 b. その森を歩いている間、昆虫をアリ一匹見なかつた.
 c. ?*その森を歩いている間、昆虫をアリを一匹も見なかつた.

(6c)は「昆虫を」と「アリを」の 2 つの対格句が同一節内に存在するため、いわゆる「二重

² Saito (2014)が指摘するように、このようなパターンは日本語には様々な形で現れる。いわゆる「部分-全体関係（あるいは、焦点とその変域の関係）」を構築していると思われる。

対格の制約(Double -o Constraint)』(Harada (1973), Kuroda (1978), Hiraiwa (2010)等)により排除されるであろう。その上で(6a)と(6b)に関して考えてみると、(6b)は完全に適格であり、(6a)も(やや容認度は下がるもの)適格文であろう。この事実は、前置型と後置型が共に付加的位置に生起できることを示している。それでは、項の位置はどうであろうか。日本語の主語や目的語の位置は基本的に「が」格や「を」格でマークされるが、とりたての「も」はこれらの要素とは容易に共起しないために、ここでは後置詞の項の位置で考えてみる。³

- (7) a. その内気な子は(大人はもちろんのこと)1人の児童とも仲良くない。
b. *その内気な子は(大人はもちろんのこと)児童1人と(も)仲良くない。
(8) a. その教師は長い間、1人の生徒からも年賀状を受け取っていない。
b. *その教師は長い間、生徒1人から(も)年賀状を受け取っていない。

前置型最小化詞が項の位置に現れるのに対して、後置型最小化詞の場合には容認度がかなり低いことがわかる。

以上をまとめると、前置型の最小化詞は付加位置にも項の位置にも起きるのに対して、後置型の最小化詞は付加位置には起きるが、項の位置には起きない。そして、以下の例文が示すように、「whも」は(付加位置に加えて)項の位置にも起きるが、「wh+1+CL」の最小化詞は先ほどの後置型最小化詞と同じく(付加位置には起きるが)項の位置には起きない。

- (9) a. その内気な子は誰とも仲良くなろうとしない。
b. *その内気な子は誰1人と(も)仲良くなろうとしない。
(10) a. その教師は長い間、誰からも年賀状を受け取っていない。
b. *その教師は長い間、誰1人から(も)年賀状を受け取っていない。

前置型と後置型の最小化詞に関して、なぜこのような違いがあるのだろうか。この問い合わせについては本稿の最後に少しだけ触れることにしたい。

ここで注目したいのは、前置型最小化詞や遊離型最小化詞とは異なり、後置型の最小化詞には「も」が出てこない点である。(11b)にあるように、後置型の場合は「も」がない方が容認度が高いのに対して、(11a)の前置型では「も」がないと非適格となる。また、(11c)の遊離型の場合には、「も」がない場合は適格ではあるが、解釈が全く異なる(最小化詞としての解釈はなくなる)。

- (11) a. 警察官は1人の子供{*/も}助けなかった。

³ この場合、「も」は後置詞の後につく。

- b. 警察官は子供 1 人{ \emptyset /?も}助けなかった.
- c. 警察官は子供を 1 人{(* \emptyset)/も}助けなかった

ここで重要なのは、「子供 1 人」という表現自体は否定の有無に関係なく用いられる表現であることである。例えば、以下の例文ではこの表現が「を」格を伴って項として現れており、その解釈は通常の“a/one child”と同じである（この点については4節で再度言及する）。

- (12) a. 警察官は 1 人の子供を助けなかった.
b. 警察官は子供 1 人を助けなかった.
c. 警察官は子供を 1 人助けなかった.

そうすると、(11b)と(12b)の解釈の違いはどのように導き出されるのだろうか。これらの2つの例文における顕著な違いの1つは類別詞表現が占める構造上の位置の違いであろう。(12b)では（「を」の存在からもわかるように）後置型類別詞表現が項の位置を占めていると考えられる。それに対して、先ほどの論考からもわかるように、(11b)の後置型最小化詞は付加詞的な位置を占めている。ただし、このような類別詞の統語的位置の違いのみで両者の解釈の違いが説明できるわけではない。(11c)や(12c)でも類別詞が遊離している（つまり付加詞的な位置にある）が、その解釈はいずれも(11b)とは異なるからである((11b)と(11c)のような例文の解釈の違いについては片岡(2009)を参照されたい)。

3. 分析

(11b)と(12b)の解釈の違いに関して、本稿で提示する仮説は以下の通りである。

- (13) 後置型最小化詞表現には音形のないとりたて詞がある。

この仮説によると、(11b)は空のとりたて詞の存在のために否定指向性を持つ。⁴ 具体的には、この例文が以下の表示を持つことになる。

- (14) 警察官は[子供 1 人 \emptyset も]助けなかった.

このように考えれば、確かに(11b)が持つ否定指向性が捕らえられるが、その一方で空のとりたて詞を仮定することには過剰生成の危険が伴うのも事実であろう。例えば、先ほど見たように、(11a)や(11c)においては、顕在的な「も」がなければ最小化詞としての解釈がな

⁴ この点で顕在的な「も」とは異なる((3)を参照のこと)が、ここではこの空の要素を（便宜上）音形のない「も」と考えて議論を進める。

い。同様に、否定指向性を持つ「wh も」の場合にも顕在的な「も」が必要である。その一方で、「wh+1+CL」の場合は、(11b)の場合と同様に、「も」がない方が自然である。

- (15) a. 警官は誰{* \emptyset /も}助けなかつた.
b. 警官は誰一人{ \emptyset /?も}助けなかつた.

このように、空のとりたて詞（「 \emptyset も」）の分布が極めて限定的である点を解明する必要がある。本稿ではこの疑問に対して、構造的な要因からその解が導き出せることを提案したい。

Stowell (1981) 以降の研究により、空の主要部 (Null head) の統語的分布に制限があることが知られている。例えば、英語における空補文標識は主語位置や付加詞的な位置には現れることができず、その分布は目的語（補部）の位置に限定されている。

- (16) a. *[_{CP} C he likes linguistics] is widely believed.
b. [_{CP} That he likes linguistics] is widely believed.

(17) a. I believed {that/Ø} John was clever.
b. I believed at that time {that/*Ø} John was clever.

これについては, Stowell (1981)が空範疇原理(ECP)による説明を提案しており, また Pesetsky (1992)は空補文標識を接辞的(affixal)な要素であり, 隣接する動詞主要部の位置へ主要部移動(head movement)するものと考えている. さらに Bošković and Lasnik (2003)は, Pesetsky 分析を土台にして, 空補文標識と動詞主要部が隣接条件を満たした上で PF において併合(PF Merger)すると提案している. この空補文標識の併合分析は現在に至るまで極めて有力な仮説である. しかし, 英語の空補文標識に関して先の ECP あるいは併合による認可仮説に対する例外があることが Bošković (1997)によって指摘されている. 以下の疑似分裂文の *wh* 節の空補文標識は ECP あるいは PF 併合が要求するような隣接した動詞主要部を欠く.

- (18) [What_i C he likes t_i] is apples.

Bošković (1997: 29)が論じるように、指定部との一致(Spec-head agreement)を起こす空補文標識は空範疇原理あるいは併合の適用対象外となっている。これはなぜであろうか。

まず, Stowell (1981)の空範疇原理分析の骨子が, 「空補文標識がその音形の欠如ゆえに「同定(identify)」される必要がある」という点であることを確認しておきたい. そして, ここではこれを以下のように考えて話を進める. まず, 節の具現化には CP の場合や TP の場合等があることを確認しておく.

- (19) a. I believe [_{CP} that he is a liar]. b. I believe [_{TP} him to be a liar].

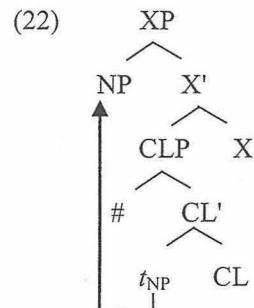
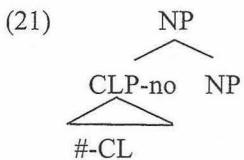
補文標識主要部に *that* などの音形があればその節が CP として同定されるが、それが空の場合にはその節が CP であることが何らかの手段で同定されなければならないと考える。その同定のプロセスで役割をはたすのが CP の外部の要素の場合と内部の要素の場合があると考えてみたい。前者は (Stowell 等が提案しているように) その CP を補部に取る動詞主要部による「同定」であり、後者は CP 指定部の要素による同定と考える。ちなみに、CP の補部の要素(TP)によっては同定が可能ではない。というのは、TP 補部の存在自体はその節が TP である可能性と CP である可能性を選別できないからである。空主要部の指定部の存在によってはじめてその節が TP ではなく CP であることが同定されるわけである。

ここで本論文が提案している空主要部「 \emptyset 」に関しても、英語の空補文標識と同様に「同定」の必要があると考えてみる。その上で、「 \emptyset 」が先の 2 つの方法のどちらによって同定されている空主要部であるかを考えてみたい。すると、外部の（隣接する）動詞主要部による「同定」の方法がこの場合は妥当でないことがすぐにわかる。以下の例文が示すように、後置型最小化詞は動詞に隣接している必要はないのである。

(20) 子供 1 人 { \emptyset /?も} その警察官は助けなかった。

また、すでに確認したとおり、後置型最小化詞は（英語の空補文標識と違い）目的語等の項の位置には現れない。そこで本論文では、もう一つの「同定」の方法、つまり指定部への統語要素の移動による同定の可能性を探ることにする。

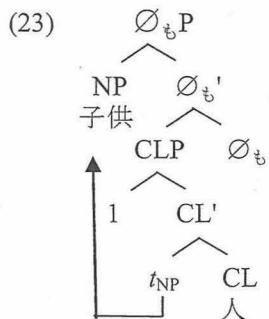
そのために、まず Huang and Ochi (2014)において提案されている類別詞表現の分析を確認してみたい。まず、前置型類別詞は NP に（あるいは NP の内部に）付加詞的な形で併合する。これは Saito et al. (2008) 等の提案に基づいている。これに対して、後置型の構造はもう少し複雑である。Huang and Ochi は Watanabe (2006) の提案を採用して、(22) にある構造を提案している。



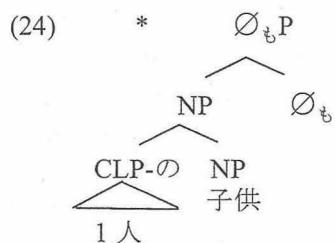
(22) の構造によれば、後置型は類別詞(CL)主要部が NP を補部に取り、さらに数詞をその指定部に取る構造になっている。さらに、類別詞主要部の補部である NP が CL 句から XP の指定部へ移動することにより、「NP-# CL」の語順が生み出される。そして、この XP 全体

が項として振る舞うことになる。ここで先ほどの議論に戻りたい。先述の通り、空主要部であるのもの「同定」のためには指定部に統語的要素が必要であると述べた。本稿は後置型類別詞表現の構造に関与しているNP移動によってこの「同定」が行われていると提案する。

この仮説に沿って、(11)の3つのパターンをそれぞれ考えてみたい。まず、(11b)の「子供1人」は以下のような構造になる。空主要部であるのものが前述の類別詞句(CL)を補部に取っており、NP「子供」がその指定部へ移動することにより「同定(identify)」される。



次に、(11a)では「も」が必要であり、のを用いると不適格となるが、これは(23)にある後置型最小化詞の場合と異なり、の句の指定部が空であるからである。



ここで1つの疑問が出てくる。確かに(24)の構造では空主要部が同定されないが、例えばNP内の要素である類別詞句がの句の指定部へ移動すれば同定が可能なはずである。

(25) $[\cdot_{\text{も}P} \ 1 \text{人の}; [\text{NP } t_i \ \text{子供}] \ \emptyset_{\text{も}}]$

この疑問に対しては、先の(18)及び(22)-(23)を再度考えるとその答えが見えてくる。まず英語の(18)であるが、この場合のwhatの移動はあくまでもこのwh句（あるいは空補文標識）の形式素性(formal features)の認可のためであり、空主要部の同定はあくまでもその帰結である。つまり、whatの移動は空主要部の同定のために駆動されているわけではないのである。同様の理由で、(16a)においてもwh節の空補文標識を同定するためだけに同節の主語であるheを空補文標識の指定部へ動かすことはできないことになる。

(26) *[CP he C [TP t likes linguistics]] is widely believed.

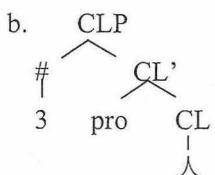
このように考えると、(22)及び(23)におけるNPの移動は空主要部の同定のためではなく、あくまでもNP(あるいは空主要部)の形式的な認可に必要なために起こっていることになる。故に、(25)で考察した可能性は移動が空主要部の同定以外に何ら役割を持たないために排除される。

続いて、(11c)でなぜ「 \emptyset も」が生起できないのかを考察する。遊離類別詞に関しては先行研究において類別詞の残置(stranding)による考え方(Miyagawa 1989等)と副詞的な要素としての規定生成の考え方(詳細はNakanishi 2008を参照)がある。ここでは後者の考え方を採用して話を進める。Doetjes (1997)やFitzpatrick (2006)によれば、英語の遊離数量詞は(27b)にあるように、空代名詞を伴う副詞句であるという。

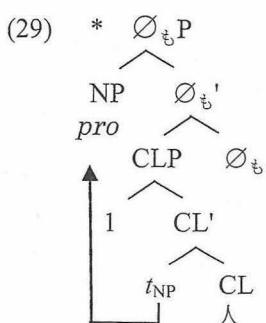
- (27) a. The students have all left. b. The students_j have [all *pro_j*] left.

これを日本語の遊離類別詞にも適用して考えると、以下のような構造になる。基本的には(22)の後置型類別詞と同じ構造であるが、補部の位置には空代名詞(*pro*)があると考える。

- (28) a. 警官は子供を3人助けた.



そしてこの構造では(22)と異なりXの投射がない。これは先ほどの空主要部の同定の議論に基づくものである。空の主要部の指定部に*pro*のような空の要素が移動しても、同定が不可能であると考えられる。そうすると、同様の論考が(11c)の場合にも成り立つと考えられる。この場合も、以下の樹形図が示すように、 \emptyset も主要部は同定されない。従って遊離最小化詞の場合に \emptyset ではなく音形のある「も」が必要になるのである。



この分析は(15)についても正しい予測をする。まず、(15b)に関しては他の後置型最小化詞と

同じ構造を立てて考えれば良い。「誰」が空主要部の指定部に移動することにより、この主要部が同定される。それに対して、(15a)では構造が(15b)より小さい。顯在的な要素は「誰」だけである。そして「誰」が \emptyset の指定部へ移動できない。これは反局所性(Anti-Locality)の原理から導き出されるであろう。ある主要部の補部にある要素が同じ主要部の指定部へ移動することは出来ないのである。

- (30) a. *[$_{\text{も}}^{\circ}$ _P [NP 誰] \emptyset _も]
b. [$_{\text{も}}^{\circ}$ _P 誰_i [CLP 1 [CL' t_i 人]] \emptyset _も]

また、片岡(2009)が指摘する以下の例文に関しても説明が可能である。これは後置型最小化詞内の名詞句(ここでは「指」)に音形がない場合であるが、この場合も(たとえ「指」の代わりに pro のような空要素があったとしても)主要部の \emptyset もが同定されないのである。

- (31) 花子は手も足も指でさえ動かしたのに、太郎は *(指)1本 動かさない。

4. 終わりに

本稿では類別詞が否定辞節において最少量化表現として機能する際の統語構造について考察した。特に後置型の場合にとりたて詞の「も」が必要ない(ように見える)理由について考察し、「も」に対応する空主要部(「 \emptyset も」)の存在を仮定し、この空主要部が指定部に要素を持つことで同定されることを提案した。

最後に、なぜ(7)-(8)にあるように後置型最小化詞が項の位置には現れないのかという問い合わせについて、その解明の手掛かりになると思われる点を述べたい。Huang and Ochi(2014)によれば、本稿の冒頭で見た3つのタイプの類別詞表現はその特性性(specificity)に関して異なる振る舞いを示す。前置型が特定及び不特定の解釈を持つのに対して、後置型は特定読みが強い。また遊離型は不特定の読みである(Downing(1987))。例えば、以下のように不特定の解釈を強要するような文脈の場合、後置型類別詞表現の容認性が下がる。

- (32) a. この病院では、平均すると、毎週3人の赤ん坊が生まれている。
b. ?*この病院では、平均すると、毎週赤ん坊3人が生まれている。
c. この病院では、平均すると、毎週赤ん坊が3人生まれている。

これに対して、本稿で論じた最小化詞としての類別詞表現はスケール解釈における出発点

としての最小の数量を表しているに過ぎない。⁵ この解釈上の差異が後置型最小化詞が項の位置に現れるのを阻んでいると考えられるが、その詳細の解明は今後の課題としたい。

参考文献

- Aoyagi, Hiroshi and Toru Ishii (1994) "On NPI Licensing in Japanese," *Japanese/Korean Linguistics* 4, 295– 311.
- Doetjes, Jenny (1997) *Quantifiers and Selection: On the Distribution of Quantifying Expressions in French, Dutch, and English*, HIL Dissertations, The Hague.
- Downing, Pamela (1996) *Numerical Classifier Systems: The Case of Japanese*, Amsterdam: John Benjamins.
- Fitzpatrick, Justin (2006) *The Syntactic and Semantic Roots of Floating Quantification*, Cambridge, MA: MIT dissertation.
- Harada, S.-I. (1973) "Counter Equi NP Deletion," *University of Tokyo Research Institute of Logopedics and Phoniatrics Annual Bulletin* 7, 113–147.
- Hiraiwa, Ken (2010) "Spelling Out the Double-o Constraint," *Natural Language & Linguistic Theory* 28(3), 723-770.
- Huang, C.-T. James Huang and Masao Ochi (2014) "Remarks on Classifiers and Nominal Structure in East Asian," *Peaches and Plums*, ed. by C.-T. James Huang and Feng-hsi Liu, 53-74, Language and Linguistics Monograph Series, Taipei: Academia Sinica.
- 片岡喜代子 (2009) 「「N 一人」と「N が一人も」」 *CLS 29. Proceedings of the Thirty-third Annual Meeting*, 12-22.
- 久野正和 (2010) 「否定一致表現の構成要素と認可の方略」『否定と言語理論』 加藤泰彦,吉村あき子,今仁生美 (編), 97-117, 開拓社.
- Kuroda, S.-Y. (1978) "Case Marking, Canonical Sentence Patterns, and Counter Equi in Japanese (a preliminary survey)," *Problems in Japanese Syntax and Semantics*, ed. by J. Hinds and I. Howard, 30–51, Tokyo: Kaitakusha.
- Miyagawa, Shigeru (1989) *Structure and Case Marking in Japanese*, New York: Academic Press.
- Nakanishi, Kimiko (2008) "The Syntax and Semantics of Floating Numeral Quantifiers," *The Oxford Handbook of Japanese Linguistics*, ed. by S. Miyagawa and M. Saito, 286-318, Oxford: Oxford University Press.
- 中西公子 (2010) 「数詞とりたての「も」と否定」『否定と言語理論』(『否定と言語理論』 加藤泰彦,吉村あき子,今仁生美 (編), 260-284, 開拓社.
- 沼田善子 (2009) 『現代日本語とりたて詞の研究』ひつじ書房.
- Pesetsky, David (1992) "Zero Syntax II: An Essay on Infinitives," Ms., MIT.
- 斎藤衛 (2014) 「削除現象:項削除を中心として」, 2014 Theoretical Linguistics at Keio (TaLK), 慶應義塾大学言語文化研究所, 2014年9月.
- Saito, Mamoru, T.-H. Jonah Lin, and Keiko Murasugi (2008) "N'-Ellipsis and the Structure of Noun Phrases in Chinese and Japanese," *Journal of East Asian Linguistics* 17, 247-271.
- Stowell, Timothy (1981) *Origins of Phrase Structure*, Doctoral thesis, MIT, Cambridge, Mass.
- Watanabe, Akira (2004) "The Genesis of Negative Concord: Syntax and Morphology of Negative Doubling," *Linguistic Inquiry* 35, 559-612.

⁵ Huang and Ochi (2014)は後置型類別詞表現と特定性の結びつきを(22)に示されるNP補部の移動に関連づけて分析しているが、本稿の論考によればこれは再考されるべきである。後置型の最小化詞の場合にも同様の移動が関与しているからである。